２．事業の概要と成果	
（１） プロジェクト目標の達成度 （今期事業達成目標）	カクマ難民キャンプ内のカクマ 1 中等校における理科室の建て替え、カクマ 2 中等校における 4 教室とトイレ 4 基の建設および 4 校でのメンテナンスチームの運営支援を行い、中等校の生徒に安全で適切な学習環境を提供した。加えて 5 校を対象に、青少年が直面する脅威から身を守るためのライフスキル教育実施体制構築、カウンセリングを行う教員や生徒の育成、当会カウンセラーによるカウンセリングの実施を通じ、カクマ難民キャンプ内の青少年の健全な育成に寄与した。また、ライフスキル教育で平和教育を含めたことや、コミュニティ啓発イベントなどにおいて地域の抱える課題に対する議論の場の提供、コミュニティ内の民族間トラブルなどの問題に対峙した際の生徒の問題解決能力の向上により、地域の安定化に貢献した。
（２）事業内容	本事業では、学習環境の整備、青少年の問題解決能力の強化、学校における青少年の「保護」機能の強化、の 3 つの活動を実施した。 （ア） 学習環境の整備 カクマ 1 中等校において、老朽化のため使用できていなかった既存の理科室 1 棟の改築、机・椅子などの什器の供与、浄化槽建設を行った。またカクマ 2 中等校において、4 教室とトイレ 4 基を増設し、教室に机・椅子などの什器を供与した。両校ともに建設は 1 月に着工、5 月に竣工し、6 月までに什器の搬入も完了した。加えて、カクマ 1 から 4 の中等校 4 校において、学校施設を適切に維持管理するために教員・生徒・保護者から構成されたメンテナンスチームの活動を定期的にモニタリングし、運営に関する助言や指導などの側面支援を行った。各校のメンテナンスチームは、新学期が開始した 1 月に年間の活動計画と予算詳細を作成し、その計画に沿って活動を実施した。また 3 月には 4 校のメンテナンスチームを対象として、学校設備修繕に必要となる道具の使い方や木工技術などの実技研修を行った。同研修では、各中等校の運営団体である Windle International Kenya (WIK) 所属の大工が講師を務め、またその後のメンテナンス活動にも WIK に参加してもらうことで、当会の活動終了後もメンテナンスチームが必要な技術支援を継続して受けられる体制を整えた。また、各校の校内において、メンテナンスチームのメンバーが他の生徒に対して学校設備・備品を大切に扱うことの重要性などを訴える啓発活動を行った。 （イ） 青少年の問題解決能力の強化 1、2 年次にライフスキル教育研修を受けた教員が各校にてライフスキルの授業を実施し、当会職員が実施状況のモニタリングと指導を行った。しかし、キャンプ内の中等校では教員の異動が多いため 1、2 年次に研修を受けた教員が 3 年次には異動してしまい、ライフスキル教育を実践できる教員数が不足してしまうという課題があった。このため、本年次でもライフスキル教育指導者研修を追加で実施した。研修は 6 月 20 日から 23 日までの 4 日間の日程で行い、全支援対象校 5 校から合計 26 名の教員が参加した。本研修において参加者は、生徒に対する指導方法のみならず、研修最終日または研修後に各校にて実施した模擬校内研修などを通して、他教員に対する指導技能も身に付けた。また、研修の後半では活動計画の策定方法について学び、各校の教員が集まって学校ごとの活動計画を立てた。研修を受けた教員たちは作成した活動計画に基づいて活動を実施した。通常のライフスキル教育の授業に加え、教員たちの発案で、他教員に対するライフスキル教育指導法の校内研修も活動計画に組み込まれ、全対象校にて実施された。 1 年次に設立された各校のライフスキルクラブの活動支援を本年次も継続して行った。定期ミーティングのモニタリングに加え、コミュ

	ニティにおける啓発イベントの実施も支援し、計5回のイベントが行われた。イベントには生徒と教員に加え、保護者やコミュニティリーダーをはじめとする地域住民たちが参加した。毎回のイベントでは、「女子が教育を受ける権利・早期結婚と早期妊娠」「違法薬物・アルコール依存の危険性」「コミュニティや学校での様々な対立や問題の平和的解決方法」など、キャンプ内で生徒らが直面している問題をテーマとした。これらのテーマにつき、ライフスキルクラブの生徒が劇や音楽を通して伝え、学校と地域がいかに連携してそれらの課題に対処していけるかについて参加者と討議した。イベントは複数校合同で実施され、他校の生徒との交流や情報交換の機会ともなった。またライフスキルに関するニュースレターを3回発行した。毎回特定のテーマを定め、各校のライフスキルクラブのメンバーが寄稿した体験談やレポートを当会職員が編集して発行し、全校に配布した。さらに、カウンセリングの活動で導入したピアカウンセラー研修を参考に、ライフスキル活動でもピアエデュケーター研修が各校の活動計画に組み込まれた。ライフスキル指導者研修を受けた教員が中心となって、ライフスキルクラブ所属の生徒を対象に自主的に研修を実施し、教員がライフスキルの授業を実施する際の補佐ができるよう、また教員が不在の際にも代わりに授業が実施できるようにライフスキルの指導法を教えた。 （ウ）　学校における青少年の「保護」機能の強化 本年次も当会カウンセラーが各校を巡回して生徒に対するカウンセリングを実施した。しかし本年次は本事業の最終年であることから、当会カウンセラーが受け持つ生徒数は最小限にとどめ、これまでに研修を受けた教員カウンセラーの活動支援を重点的に行った。 その一環として、2 年次にカウンセリング研修を受けた教員を対象にリフレッシュ研修を実施した。2019 年 1 月 24 日から 26 日の 3 日間で実施し、全対象校から 22 名の教員が参加した。内容としては、2 年次の研修内容の振り返り、カウンセリング実践演習、さらにこれまでの学校でのカウンセリング活動を通して感じた課題や疑問を共有し、解決策についての話し合いを行った。 また本年次も基礎カウンセリング研修を実施した。各校から 5 名の教員を追加で選出し、計 25 名の教員が受講した。これは教員の頻繁な異動や、カウンセリングを必要とする生徒の多さに対応すべく、より多くの教員のカウンセリング実施能力を強化する必要があったためである。参加教員の長期学校不在による授業への支障を避けるため、研修日程は 3 回に分けて 5 月 15 日から 19 日、7 月 6 日から 7 日、7 月 12 日から 14 日の計 10 日間にわたって実施した。前半の 5 月には基礎的な概念や知識の習得に焦点を当て、後半の 7 月にはより実践的なスキルを体得することを目的に多くの模擬演習を組み込んだ。 また 2 年次に引き続き、全支援対象校においてピアカウンセラー研修を実施した。各校約 30 名の生徒が 2 日間の研修に参加し、カウンセリングの基礎概念や実践方法について学び、悩みを抱える同級生をどのようにサポートしたら良いかについて学んだ。研修には、カウンセリング研修を受講した各校の教員も講師として参加してもらうことで、教員カウンセラーとピアカウンセラーの連携を強め、協力体制を築くよう工夫した。生徒同士では対処が難しい暴力、自殺、薬物関連の悩み等の相談をピアカウンセラーが受けた場合は、教員カウンセラーに照会するよう指導したり、ピアカウンセラーが教員カウンセラー、当会カウンセラーおよび専門機関に照会できるよう連絡先のリストを提供したりして、カウンセリングの連携スキームを確立した。研修を受けたピアカウンセラーは全校集会で紹介され、他の生徒たちに周知

	された。また当会カウンセラーはピアカウンセラーに対しても定期的に巡回指導を行った。また 10 月 23 日には本年次に研修を受けたピアカウンセラーを対象に全対象校から合計 158 名の生徒が集まり、集会が開かれた。集会では、過去の取り組みの振り返りを行い、今後もカウンセリングスキルを活かして学校内の課題解決を行っていく機運を高めた。 上記の全ての活動に関連して、本年次が事業最終年ということから、事業終了後も活動を継続していけるようマネジメント研修を実施した。同研修は 3 月 21 日から 23 日の 3 日間にかけて開催し、各校においてメンテナンス活動、ライフスキル教育活動、カウンセリング活動の各活動を主導していく主任教員および校長ら含め 25 名の教員、5 名の PTA メンバー、学校運営団体である WIK 職員 2 名の合計 32 名が参加した。研修は、当会が学校側と連携して実施してきた 3 年間の活動を総括するとともに、今後各校の教員らが WIK の支援のもと、活動の運営を引き継いでいく仕組みを作ることを目的とした。研修内容としては、活動計画の策定・記録方法、人員の選定、教材や資金の調達・管理、担当教員間の情報共有や能力強化、モニタリングおよび評価などを取り上げ、各校でのこれまでの活動を通して得られた成功事例や教訓、課題などを共有しながら持続的な運営方法について学んだ。研修後半には先述の 3 つの活動分野ごとに年間の活動計画を作成し発表した。研修後は、作成した活動計画を学校ごとにより具体的な日程や目標数値に落とし込み、当会職員がモニタリングと活動支援を行った。
（3）達成された成果	対象校の教育施設・設備および維持管理体制が整備され、生徒が安心して就学できる環境が整った。また、対象校の教員、生徒、保護者、地域住民を対象とした包括的な活動を行うことで、各校でライフスキル教育やカウンセリング活動が行われるようになり、生徒の問題解決能力が向上するとともに、学校の保護体制が強化された。これらの成果は、「持続可能な開発目標（SDGs）」における、目標 1「あらゆる場所のあらゆる形態の貧困を終わらせる」、目標 4「すべての人に包括的かつ公平な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」に沿っている。特に、2030 年までに貧困層および脆弱層に対し十分な保護を達成することを目標とするターゲット 1.3、また、2030 年までにすべての子どもが公正で質の高い中等教育を修了できるようにすることを目指すターゲット 4.1 の達成に寄与するものである。 （ア）～（ウ）の活動ごとの成果は以下の通りである。 （ア）学習環境の整備 【成果】 生徒の教育を受ける機会が拡充され、学習環境が整うとともに、校舎や教室が適切に維持管理された。 【指標】 ① カクマ 2 中等校に 4 教室が増設されたことにより 288 人が新たに教育機会を得るとともに、カクマ 1 中等校に理科室が建設されたことにより 3,780 人（2019 年 10 月末時点）の生徒が適切な理科実験の授業を受けられるようになった。理科室においては浄化槽も設置したことで、実験で発生する排水も適切に処理されるようになった。さらにカクマ 2 中等校では女子トイレ 4 基を増設し、女子生徒が安心して通学できる衛生的な環境の実現に貢献した。 ② カクマ 1 から 4 の中等校 4 校において教員、生徒、保護者からなる学校施設のメンテナンスチームの活動が継続され、今期事業開始時に作成された活動計画のうち 8 割以上（約 87%）が実行された。これにより、各校 100 台以上の机、教室の床・壁・黒板等が修繕され、学習環

	境の整備・改善に貢献した。またメンテナンス活動を通して習得した技術を活かして卒業後の進路選択を広げた生徒もおり、副次的な効果も見られた。 （イ）青少年の問題解決能力の強化 【成果】 教員が学校でライフスキル指導を実施し、生徒がさまざまな脅威から身を守るための知識や問題を平和的に解決するすべ、ソーシャルスキル（社会技能）を教授した。 【指標】 ① 研修を受けた教員が生徒へライフスキル教科教育を実践し、2,863人の生徒が受講した。本年次では同じカクマキャンプ内で活動する国際NGOであるFilm Aid Internationalの協力のもと、薬物使用や早期妊娠に関する映像教材を放映するなど他団体とも連携した授業を実施することができ、また視覚教材を使用することでより多くの生徒に対して効果的にメッセージを伝えることができた。加えて、追加の活動として新たに26名の教員に対して教員研修を実施したこともあり、当初の目標値であった1,500人を大きく上回る数の生徒がライフスキルの授業を受講する結果となった。 ② 5校で1回ずつ保護者や地域住民を対象としたライフスキル教育に関する啓発活動を実施し、合計522名の地域住民が参加した。アンケートにおいて調査対象の参加者の9割以上(約94%)がライフスキル教育の理解が深まったと回答した。 （ウ）学校における青少年の「保護」機能の強化 【成果】 生徒が悩みや問題を相談できる環境が整い、それらへの適切な対応がなされた。 【指標】 ① 25人の教員がカウンセリング研修を受講した。研修後に行った事後アンケートにおいて、研修に参加した教員の100%が、理解が深まったと回答し、80%以上の教員が理解を深めるという目標を大きく上回った。 ② 先行事業で研修を受けた教員22名へリフレッシュ研修を実施し、事前テストの正答率5割(約55%)から研修後の確認テストで8割(約82%)まで向上した。 ③ のべ248名の生徒が、研修を受けた教員によるカウンセリングを受けた。加えて78名の生徒が、当会カウンセラーによるカウンセリングを受けた。 ④ カウンセリングを受けた生徒の100%が、カウンセリングを受けることが問題解決に役立ったと回答した。また、これまでの活動の中で、カウンセリングを受けた生徒からは、「紛争のトラウマが緩和された」「自尊心が高まった」といった声も聞かれた。
（4）持続発展性	（ア）学習環境の整備 本事業にて増築・修繕した教室、理科室、机・いす、トイレは、完成後、当会とUNHCRの間で覚書を締結し、同機関へ引き渡した。今後は、キャンプ内の中等教育校の運営を担当するWindle International Kenya（WIK）が運営・維持管理を担う。壁のひびや学校備品などの軽微な修理や製作に関しては、WIKによる技術的な協力のもと、各校のメンテナンスチームが行っていく。活動に必要な資金は各校が生徒から集めた学費から割り当てるよう調整を行う。2019年からメンテナンスにかかる費用は継続的に収集できている。

	（イ）青少年の問題解決能力の強化 第1年次および2年次において研修を受講した教員が、継続してライフスキル教育を行っていることが確認できた。一方で、転勤や離職した教員もいることが判明したため、各校5名（計25名）を対象にライフスキル教育指導者研修を実施し、受講者が中心となり教員間で知識や技術を伝授し研鑽していけるよう、指導技術や校内研修の実施方法などについて指導した。研修後、各校にて校内研修が行われ各校10名以上の他教員が参加していたことを確認した。また、指導教員の不在への対策であるライフスキルクラブ所属の生徒を対象にしたピアエデュケーター研修も、各校で1回以上実施されたことを確認した。これらの活動を通して、各校で研修を受けた教員が中心となり、他教員や生徒も協力してライフスキル教育を継続していける体制を構築した。 （ウ）学校における青少年の「保護」機能の強化 第 1、2 年次に研修を受講した教員に加えて今年次に新たに研修を実施したことで、各校に4名以上の教員カウンセラーが在籍する状況となった。今年次は当会カウンセラーが直接カウンセリングを担当するよりも、各校での教員カウンセラーによるカウンセリング活動の指導とフォローアップに注力することで、教員カウンセラーの能力強化を図り、事業終了後もカウンセリング活動が継続される体制づくりを行った。教員カウンセラーやピアカウンセラー内で選出されたリーダー達が主導して、ピアカウンセラーミーティングを実施する取り組みもみられた。また、2 年次に引き続き今年次もピアカウンセラー研修を実施して各校におけるピアカウンセラーの数を増やし、その存在を校内で周知したことで、生徒が悩みや問題を相談できる間口を広げ、学校内で課題に早期に対処できる環境を整えた。 各学校が自立して上記（ア）～（ウ）の活動を継続していけるよう、各学校でそれぞれの活動を担当する主任教員を選定し、校長、保護者、学校運営団体であるWIKの職員を含めて3日間のマネジメント研修を実施した。これまで当会が介入していた各活動の計画策定や実施の活動の記録、教材の管理、担当教員間での定期的な情報共有や能力強化、進捗管理・評価などについて知識やノウハウを伝え、具体的な年度計画の策定も行った。研修に参加した校長やWIK職員の発言からも、学校として、担当教員および活動の継続をサポートしていく意思があることが確認できた。また同研修を今年次の事業前半に開催したことで、教員が自発的に実施する活動を当会がモニタリングする期間が一定期間設けられ、教員主導による活動の実践を確認することができた。さらに（ア）～（ウ）の3つの活動内容を調整することで相乗効果を創出することを目指し、活動調整委員を設立することとなった。これにより、3 つの活動の担当教員が連携して資金調達の交渉を学校運営機関に対して行ったり、カウンセリングルームのメンテナンスが必要な時は協力したりといった活動が可能となった。参加した教員からは、「AAR の事業終了後も活動を継続していきたい」、「学校の運営委員会にも資金調達のために働きかけていきたい」などの声が聞かれた。その後も学期ごとにフォローアップのミーティングを実施し、具体的な活動計画の作成および実施を支援した。